

週日の説教

金 大烈 神父 2008年8月5日(火)

《法律は人を守るためにあるものです》

今日の福音(マタイ 15・1-2、10-14)で、ファリサイ派の人々と律法学者達は、イエスの弟子達が食事の前に手を洗わなかったことについてイエスを試そうとしました。皆様はどう思いますか？ 世の中には、今も昔もそしてこれからもいろいろな法律があります。それらの法律は、状況にあわせて改められる場合もあるし、そのまま使われ続ける場合もあります。しかし法律ができれば、私達は大体それに縛られます。その法律を守らなくてはならなくなります。もし守らなければ、違反や違法となります。

昔、イスラエルの人々には「律法」という法律がありました。その法律は作られてから何百年、何千年たっても変わらず、とても強い力を持つようになりました。イエス様の時代は、律法が作られてから何千年もたっていて、それを守るようにうるさく言われている時代でした。イエス様がおっしゃっているのは、「律法を守らないようにしなさい」ということではありません。その逆です。しかし、イエス様が本当に言おうとしているのは、その律法より勝るものがあるということです。全ての法律には必ずそれに勝るものがあります。それはその法律を作った時の精神です。

法律は必要によって作られるべきです。しかし人間のおろかさ、それを作った時の精神を忘れて、その法律の言葉のみに縛られてしまうのです。だから、「食事の前に手を洗わない」という前になぜそうしなければならないのかを考えてみなければなりません。それは、汚れたものを清めるためではありません。昔は食糧を求めるのは難しい時代でした。だから、食事は命と直接につながっている大切なものでした。与えられた食事に対する感謝の表現方法として、自分の手を洗い、きれいな心で感謝しながら食事をしましょう、という意味で法律が作られたのです。しかし、時がたってその意味は変わってしまいました。手がきれいであっても何回も洗わなければならない。きれいに洗っても5分後に食事をする場合には、また洗わなくてはならない。このように、間違えた流れになっていってしまうのが人間のおろかさです。今日イエス様は、はっきりおっしゃっています。「口に入るもので人間を汚すものはない。口から出るものが汚す」と。簡単明瞭な言葉です。

よく考えてみると、法律や規則があるとき、なぜそれが必要かを私たちは子ども達にきちんと教えているのでしょうか？「条件なしにこれを守らなければならない」「これを行ったら人に迷惑をかける」「これをしたら目立ってしまうから危ない」、そのような必要のないことばかり教えているのが今の時代の教育です。子ども達は、小学校を終わるくらいでこの世の中の正しい生き方についてほとんど習います。それなのに犯罪も人殺しもなくなりません。

自分の行おうとしていることがよいことか、悪いことか、中学生くらいのレベルになれば全て分かります。それでも実行ができない。それは、なぜそれを守らなければならないかがはっきり身につけていないからです。見えないところでは、更にきれいな生き方をしなければならないことをなぜ教えていないのでしょうか。人が見ている前では目立つから気をつけるように教えている。それは逆にいえば、見えなければなんでもしてよいこととなります。この世の中はそうってはいませんか？

私は渋川にいた頃、犬を連れてよく散歩に出かけました。静かに座って星を見ながら黙想をしていると、車のヘッドライトが遠くから近づいてきて、近くに止まります。そしてドアを開けて、ゴミだけ捨てるとまたすぐに走り去って行きます。私がいることには全く気づいていなかったでしょう。誰もいないから、見ていないところだから、それをしてよいと思ったのでしょうか。法律の種類は多いけれど、どれもその現場を人に見られなければよい、という精神になっていないのでしょうか？そういう無意識が、この世に住んでいる私たちの心の中に病気のように住み込んでいる気がします。明るい

ところより暗いところで、自信を持って素晴らしい姿を見せてほしいです。

今日の福音(マタイ 15・1-2、10-14)の「食事の前に手を洗う」ことについても、たぶん人が見ていなければあまり洗わないのが人間の心理でしょう。ファリサイ派の人達も人の前では必ず手を洗い、法律を守る姿を見せたと思いますが、見えないところでは、きちんと守っていたか疑いがあります。

皆様、今日の福音を通してもう一度考えてみましょう。私たちが食事する前に、また何か良いことをする前に、イエス様は「あなた方がまず求めなければならないのは感謝の心です」とおっしゃっています。それを私たちはきちんと意識しているでしょうか？ 感謝ができなければ私たちの信仰は絶対に続けられません。毎日、一生懸命にミサに与ってご聖体をいただいても、その中に感謝の心がなければ、その信仰はあまり長くは続きません。感謝の心は、変わらない信仰です。皆様はこのミサを感謝の心で捧げていると思います。しかしこのミサだけではなくてあらゆることについても、感謝の心で見ようとしてください。そうすれば許すことも、その他のいろいろなこともできます。もし感謝から始まらなければ何もできません。

たとえば、あの人は社会のためにこの世にいないほうがよいという気持ちになることがあります。日本では死刑が法律的に認められています。もし、死刑はいけないという内容に法律が変わったら反対する人がいるでしょう。残酷な方法で人を殺したとか、人間として、してはいけないことをした人を見たら、あの人はあの何倍も苦しませて殺したほうがよい、と思う人もいるでしょう。そういう気持ちは私たち全ての人間の心にあるかもしれません。しかしそれは悪魔の誘惑です。なぜならば命を奪う権利は神様にしかありません。それはカトリック教会が2000年間かたく守ってきた精神です。もし私たちに感謝の生活ができれば、そのような人のことを耳にしても、その人のために憎しみや殺そうとする心を持つより、憐れみの心が先に生じると思います。あの人にも母がいるのだろう、あの人にも愛した人がいるのだろう、なぜこのようになってしまったのか、何の傷がこうさせてしまったのか。

この頃、理由もなく人を殺す事件がけっこうありますね。社会は、そのような人を責めるような感じになっています。そしてそういう人々を掃除しないといけないようにはっきりと導いています。マスメディアや政治家達がいつもそのようにしようとしています。しかしそれはまず、私たち全体の責任です。そのような人が出てくるように許したのは私たちの心です。そういう事件があったら、まず被害にあった人達のために、私たちは当然祈ってあげるべきです。しかし、犯罪者のためにもイエス様に、「赦して下さい」「癒して下さい」「悔い改めることができるように導いてください」と祈ることが正しい律法精神ではないでしょうか？ 律法というのは人を責めるため、殺すため、裁くために作られたものではなくて、人間をできるだけたくさん守るために作られたものです。しかし、その意味を間違えると、人間を守るためではなくて人間を殺す法律になってしまいます。その歴史がイスラエルの歴史の中に今も生きています。私たちはそういう間違いをしないようにイエス様に祈りましょう。

ありがとうございました。